木村二郎さんの視点から
八ヶ岳南麓を学びなおして
次の世代へつないでいこう!

特定非営利活動法人 文化資源活用協会［山梨県北杜市］

設立年月　1999年11月
（2000年2月NPO法人化）
メンバー数　約40名
代表者名　髙橋 正明
〒407-0322
山梨県北杜市須玉町下津金2963 須玉歴史資料館内
特活）文化資源活用協会
連絡先　髙橋 正明
TEL 0551-20-7100
FAX 0551-20-7105
info@tsugane.jp
bunka@tsugane.jp
http://www.tsugane.jp/bunka/

わたしたちについて
地域の歴史有形無形文化財保護に係る人材により立ち上げました。田舎暮らし体験ハウスとしての古民家再生活用と、地域の明治学校校舎（県文化財）の活用を柱に、地域資源の斬新な活用こそ文化継承に必要と考え、常にチャレンジしています。

テーマ｜「RE」温故知新の暮らしとコミュニティデザイン
～デザイナー木村二郎から学ぶ～

地域の概要｜北杜市は山梨県の北西部に位置する人口は4万9千人のまち。須玉町他6町村が合併して2004年に誕生（更に2006年に小淵沢町が合併）。須玉町に属する津金地区は八ヶ岳南麓に位置し、総戸数130軒ほどの集落である。このうち空き家と独居世帯がそれぞれ40軒を超えて、過疎・高齢化が著しい。過去10年間に人口の約20%が減少（H9～H19）し、高齢化率は現在48%に達する。この地区は古くからの歴史があり、遠く縄文時代から平安、鎌倉、戦国時代にわたる様々な遺跡・史跡が存在している。

主要な産業は農業（米とリンゴ）で、リンゴ園が多く、つがる、富士などの品種が栽培されている。田園風景が広がり、遠景には山岳風景が望める。かつて民家を建てる時には、地元の木材を使い、地元の木工作業等が得意な者が大工の棟梁ととなり、そのもとで「結い」により集まった地元住民が「手間」として多くを手伝ったといわれている。

活動の概要｜この地域で活動し、様々な作品を残した木村二郎氏（アーティスト・デザイナー）について、木村氏を知らない若者が、関係者へのヒアリングや作品資料を調査整理し、そのアーカイブ化（インターネット、冊子、マップ）を図った。また、木村氏の作品や氏に関する資料等を集め回顧展を開催した。この回顧展では、主展示会場のほかに、木村氏ゆかりのギャラリーや建築物などの見学も可能とする広域ネットワークを組んだ。

活動に至った理由や背景

過疎・高齢化が進んでいる地域ですが、明治・大正・昭和と三代にわたる校舎（旧津金学校）が、様々な形で残存していることから、年間10万人以上の観光客が訪れます。また、都会からの移住者や二地域居住者が増加している地域でもあります。私達は、北杜市須玉歴史資料館（明治8年創立　明治校舎）の指定管理者として、歴史資料館内に事務局を置いています。施設内に「カフェ明治学校」を設立し、運営も行っています。カフェは、住民同士をはじめ、住民と来訪者との交流スペースとしても活用されています。

2004年に亡くなった故木村二郎さんは、1989年に八ヶ岳に移住して以来、オブジェや家具の製作、レストランやギャラリーの設計などを手がけたアーティスト・デザイナーです。老朽化した大正校舎は、二郎さんが住民と共に修復を行ったという実績もあります（残念ながらこの校舎は建替えられ、現在は二郎さんの手がけた修復の雰囲気だけが残されています）。彼の作品や建築の斬新さは、今でも語り継がれていて、数多くの作品が残る八ヶ岳南麓を、二郎さんに共感した若い世代が現在でも訪れています。しかし、一方で彼の残した軌跡が、少しずつ地域から薄れつつあります。

私達は、地区にある築120年の古民家（空き家）を5年間にわたり首都圏や地元の大学生とともに修復し、田舎暮らし体験ハウスとして活用を始めたいと考えていました。この修復作業を通して、地元住民と若者との交流も盛んになり、若者にも田舎に暮らしてほしいとの思いを強くしました。しかし、若者がずっと住みたい・本当に住みやすい魅力的な生活・室内空間とは、どのように創造するべきなのかが、課題となりました。そこで、二郎さんの作品が点在する八ヶ岳南麓地域をネットワーク化し、古材・農具民具や伝統歴史文化などからもインスピレーションを得ていた二郎さんの感性に触れ、改めて彼が創った空間や作品を体験することで、魅力的な空間・新しい八ヶ岳の住まい方を、ワークショップなどを通して提案したいと考えました。

活動内容

活動において、5 つが活動の柱となりました。
Ⅰ)木村二郎さんの作品資料展示
Ⅱ)木村二郎さんの作品資料調査整理とアーカイブ化
（インターネット、紙媒体）
Ⅲ)木村二郎さんの八ヶ岳南麓の
フィールドワーク・マップ作成
Ⅴ)空間を考えるワークショップの開催
Ⅵ)八ヶ岳南麓の世代交流とネットワーク作り

木村二郎さんを知る

2008 年より中心になるメンバーが集まりミーティングを重ねていました。まず『デザイナー木村二郎とは？』と題し、作品スライド・映像・お話を通して、木村二郎さんを紹介する集まりを開催し、仲間となるボランティア参加者も募っていきました。以降、プロジェクトの中心となる実行委員（デザイナー・大学生・大学院生・一般・ギャラリー・カフェ・公務員・地元住民他）が集まりました。

○ 2009 年 3 月14 日
『スライド＆トーク － デザイナー木村二郎とは？』開催
参加者 40 名

木村二郎さんを語る－ヒアリング調査

木村二郎さんの残した作品・建築・資料等がどこにあるのか、調査を始めました。
同時に力を注いだのが、関係者への直接のヒアリングです。総勢 20 名近い方へのヒアリングを行いました。地域のアート・文化の中心だった人たちが年齢を重ねていることは、実は今回のプロジェクトを行うなかでも大きな意味をもっていました。ボランティアの若い学生 10 名程度が中心となり、ヒアリング、二郎さんのフィールドワーク・軌跡を調査することで、地域で活躍する人々と出会い、話を聞き、二郎さんが見ていた風景や空間を二郎さんの関係者と共有することができました。

○ 3 月～ 7 月
木村二郎関連資料の調査整理作業
ヒアリング・ワークショップ活動

「回顧展」会場。イメージは「倉庫から引っ張り出してみた感じ」に、オブジェ作品・自筆のデッサンスケッチ含め 100 点近くが並べられた。二郎さんの作品によく見られたクロス（十字）が床に隠されていて、何かと何かが交差するような場所という意味合いが隠れたモチーフに（お気づきでしたでしょうか？）。

アーカイブ化

ヒアリング調査は、インターネットと冊子という形でアーカイブとして残す方向が出来上がりました。そして、二郎さんの軌跡は貴重な地域の文化資源でもあるとの観点から、地域でも出来るだけ残していきたいと考えています。

○８月上旬　　ポスター・チラシの作成

プロジェクトを立ち上げた時点から、みんなで多く話しあったひとつが、タイトル・ロゴでした。『＋ Re_JIRO』の [Re.] とは、再びという意味と、新しくする、出会うなどの意味を含んでいます。二郎さんと出会うことで、古いこと新しいことすべて、自分達の文化、コミュニティと空間・住環境を見直すというような意味をもたせました。また、彼の多様な才能を表現する意味で、さまざまなフォントを組み合わせた独自のロゴをデザイナーの角田純さんが提案してくださり、それが、今回のプロジェクトの大きな旗印ともなりました。

八ヶ岳南麓　＋Re_JIRO　MAP

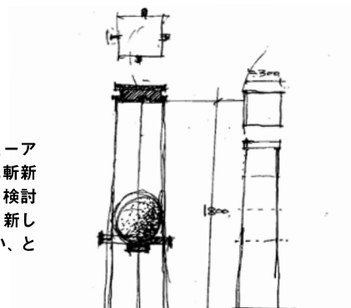
今回の企画にあたり大きな柱となったのが、私達の活動する八ヶ岳南麓を網羅した木村二郎さんの「フィールド・ワークマップ」の作成です。縄文の遺跡から、自然、農山村、パワースポット、散歩道など、二郎さんの軌跡を巡ることで、二郎さんの眺めていたものが、自分達の大きな地域資源であり文化であることを、発見できるものになりました。このマップは、学生の提案でクリアファイルの中へセットされて持ち運べる形のデザインになりました。

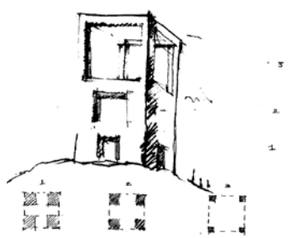
○８月下旬　『MAP ＆クリアファイル＋ Re_JIRO』完成

特別展示　新しい空間の試み

調査によって、古材家具のみならず建築設計、空間プロデュース、初期のデッサン、スケッチ、詩、オブジェ、写真、晩年の映像作品とすべてのアートが彼の表現であったことが分かりました。そのすべてをはじめてまとまって発表できる場として主展示会場を１箇所と、特別展示会場としてゆかりのギャラリー２箇所、ほか建築に関しては、見学可能なオープンな形で協力いただき、八ヶ岳南麓地区全体を覆うネットワークを組みました。

今回の調査で、大正校舎の幻のリニューアルプランの図面が発見された。本当に斬新で、もしその図面どおり行政がそれを検討し実現していれば、八ヶ岳南麓に全く新しい空間が提案されていただろうと思い、とても残念！





９月６日に開催したオープニングトークショーは満席。二郎さんのことを知ってほしいと多くの人が長いコメントを寄せた。この日集まったことが刺激となり、多くのギャラリーやミュージアムで 2010 年のイベント企画へとつながりが生まれた。

地元・八ヶ岳で集めた 3000 年以上前の縄文土器の破片からインスピレーションを得て生まれたオブジェ（上段中央）。話題となり、縄文をみなおすイベントが次々企画されていることは面白い。私達ＮＰＯでも、2010年９月11 日に『縄文カフェ×トークライブ』の開催を決定！

○９月５日～ 11 月30日
『企画展 ＋ Re_JIRO 木村二郎回顧展』
＜会場＞
北杜市立須玉歴史資料館
ギャラリートラックス
峠のギャラリー　歩゛ら里
＜見学オープン＞
七賢レストランだいみん
ぼんてんや　ほか

○９月６日
『トークショー＋ Re_JIRO』
（須玉歴史資料館 / 大正館）
参加 60 名

○９月５日～
『ワークショップ - 空間＆食の提案』
（カフェ明治学校）

○ 10 月中旬
『冊子 ＋ Re_JIRO 木村二郎』完成

当初、住民からのヒアリング内容をまとめて編集するような「二郎さんについてみんなが語る」冊子を計画していました。しかし、話し合った結果、アーカイブ化するものは保存と同時にオープンにできるインターネットという媒体を選ぶことにしました。

冊子は、このプロジェクトによって二郎さんの資料の整理調査の過程で発見された、二郎さんが書き残した言葉や詩、普段は目にすることができないデッサン・スケッチなどを主にした内容へと、大幅に構成を変更しました。デザイナー、編集者は、あえて二郎さんを知らない面々が関わり、ボランティアで一緒に作り上げました。ですので、新鮮で、二郎さん自身に触れて対話する内容のものをあえて製作しました。web・MAP・冊子、企画展・ワークショップとそれぞれの特徴にあわせ媒体を分け、さまざまな角度から地域を考え、二郎さんの作品・空間を感じることができる構成になりました。

空間プロデューサー豊嶋秀樹さんとボランティアの出会い

展示空間をどうするかが、最後まで難しいところでした。空間プロデューサーの豊嶋秀樹さんが、共感賛同してくださり、展示デザインを担当してくださいました。そしてボランティアとともに展示、企画展を迎えました。

二日目にはトークショーを開催。木村二郎さんの親友でもあるアーティスト（デザイナー）角田純さん×豊嶋秀樹さんを迎え、コミュニティと二郎さんとのかかわり、古材や農民具などの素材とアート、今回のプロジェクトの意味などが語られました。

会場となった津金学校・明治校舎のカフェでは、二郎さんの作品家具で食事が出来る空間作りを行い提案しました。遠方からの来訪者にとどまらず、地域住民も頻繁に足を運ぶようになり、魅力的な空間のありかたを考えさせられました。

企画展来館者の感想より

□二郎さんの作品のルーツが縄文土器と知り、驚き、又とても楽しかったです。（男性）
□この空間と二郎さんの作品がとってもマッチしていて、ずっといたくなるような居心地のいい空気が流れていました。（男性）
□とても刺激を受けました。何か自分でも造ってみたくなりました。（女性）
□人も物も世界も移り変わっていくけれど瞬間を捉えることは出来るんだって感じました。（女性）
□やさしくてなつかしいのにモダンな感じがとてもよいと思いました。（女性）
□古材の魅力に圧倒されました。（夫婦）
□縄文土器は私も大好きです。創作意欲がバンバン沸いてきます。（夫婦）

カフェ利用者の感想より

□木村さんの作品のこの椅子に坐りお茶を頂いていると、気持ちがとてもすっとします。（主婦）
□昔のお蚕の棚やミシンの足がこんな風に命を与えられているなんて感動しました。（男性）
□このテーブルの足は水車の歯車。自分も手に入れていたが使いようが無いと思って売ってしまった！こうやって使えばよかったのかと・・残念！二郎さんの発想が刺激になりました。（男性）

ワークショップ
ー自分の居場所に旗を掲げてカレーを食べろ！ー

今回の回顧展の空間プロデュースを手がけてくださった豊嶋秀樹さんと一緒に、最後に“自分の居場所”をテーマに“旗”作りのワークショップを開催しました。木村二郎さんの回顧展やさまざまな調査を通して、最後に考えたいと思ったのは「自分の居場所」「空間」でした。“空間”“自分”“他人”の関係をどのように存在させながら心地よい空間を構成していくかを考えるきっかけになればと思いました。

なぜなら、生前木村二郎さんが主宰していたギャラリートラックスは、斬新な空間を作り出していました。いつも多くの人が集い、創造性にあふれていました。その空間は、ある意味で、二郎さんが掲げた“FLAG ＝旗”だったのではないかと感じました。本来、集団のアイデンティティを示し拠り所とするために、掲げられるのが“旗”ですが、あえて個人が“旗”を創造し掲げることは、魅力的に暮らすための自己表現が地域においても必要だ、というひとつの啓示ではないかとも思ったのです。普段は意識しない“自分の居場所”を“他人”に示すという楽しくも、実は深いワークショップを、一緒に提案してくださった豊嶋秀樹さんは、もうひとつ、このワークショップに意味を与えています。初めてその場で出会う参加者同士が、協力して一つのもの（カレー）を作り上げて分け合うという体験と、“旗”作りという孤独な体験のふたつが同時進行することで、“自分”と“集団”を改めて発見するのです。参加者は思い思いの発見をしました。カレー作りの作業では、皮を剥いたり炒めたり、ひとつひとつの作業を通して自分で「自分の仕事＝居場所」を見つけだします。“旗”作りでは身体を使って「自分の思い＝表現」を発見していきました。

参加者の感想より

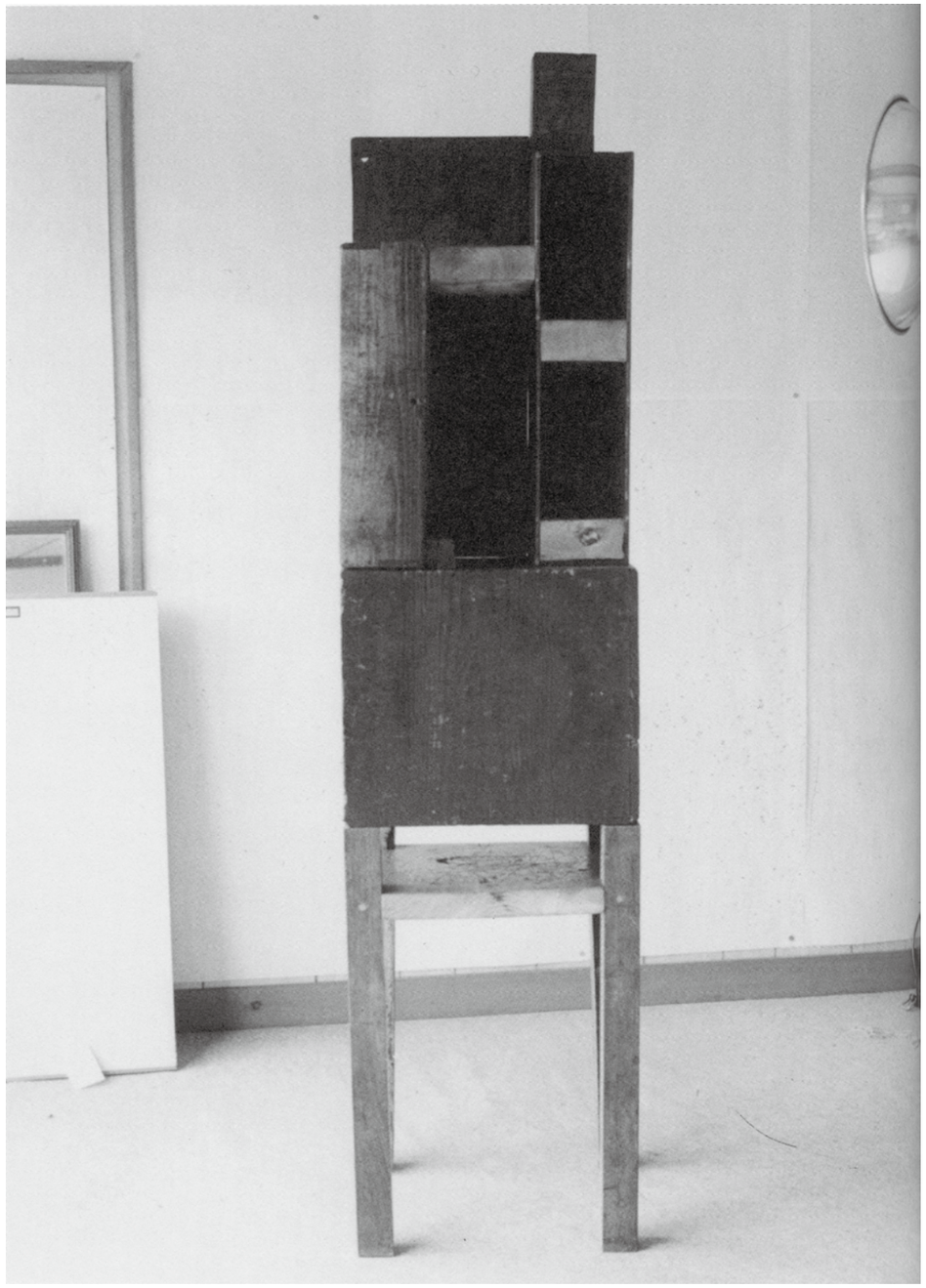
□豊嶋さんの温かい人間性が伝わってくるようなワークショップで、私も、とてもたくさんの熱を受け取りました。ありがとうございました。萌芽として、何かこれまでの経験と今の学びを生かしてワークショップみたいなことをしてみたいと思いはじめました。（主婦）

□あの津金のロケーションと校舎の雰囲気の中で、皆で肩を並べて、何かをつくる、食べる、語る、というのが、とにかくあの場にはとても似合うなあ、と思いました。まさか自分も、パンを使って旗をつくることになるとは、参加する前は思ってもいませんでした（笑）（会社員）

2010 年
○ 3 月19日
『ワークショップ － 自分の居場所に旗を掲げて
カレーを食べろ！』
参加 20 名

○ 3 月19日～ 4 月23日
ワークショップ作品　展示

特産のりんごを使ったカレー作り。当初「おでん」を提案したが却下される・・・「おでんでは駄目。大根、卵・・各々が好きなものだけ食べるとみんなバラバラ。皆で一緒のものを食べるのがこのワークショップの意味、だからこそカレーなんです！」と豊嶋さん。なるほど一納得。驚き・発見があって面白い。



二郎さんの作品。時代を経てもモダン、つまりいつも新しい。このイメージから、プロジェクトの名前「Re ー再び、新しくなる、古くならない」という言葉が生まれました。

活動の特徴など

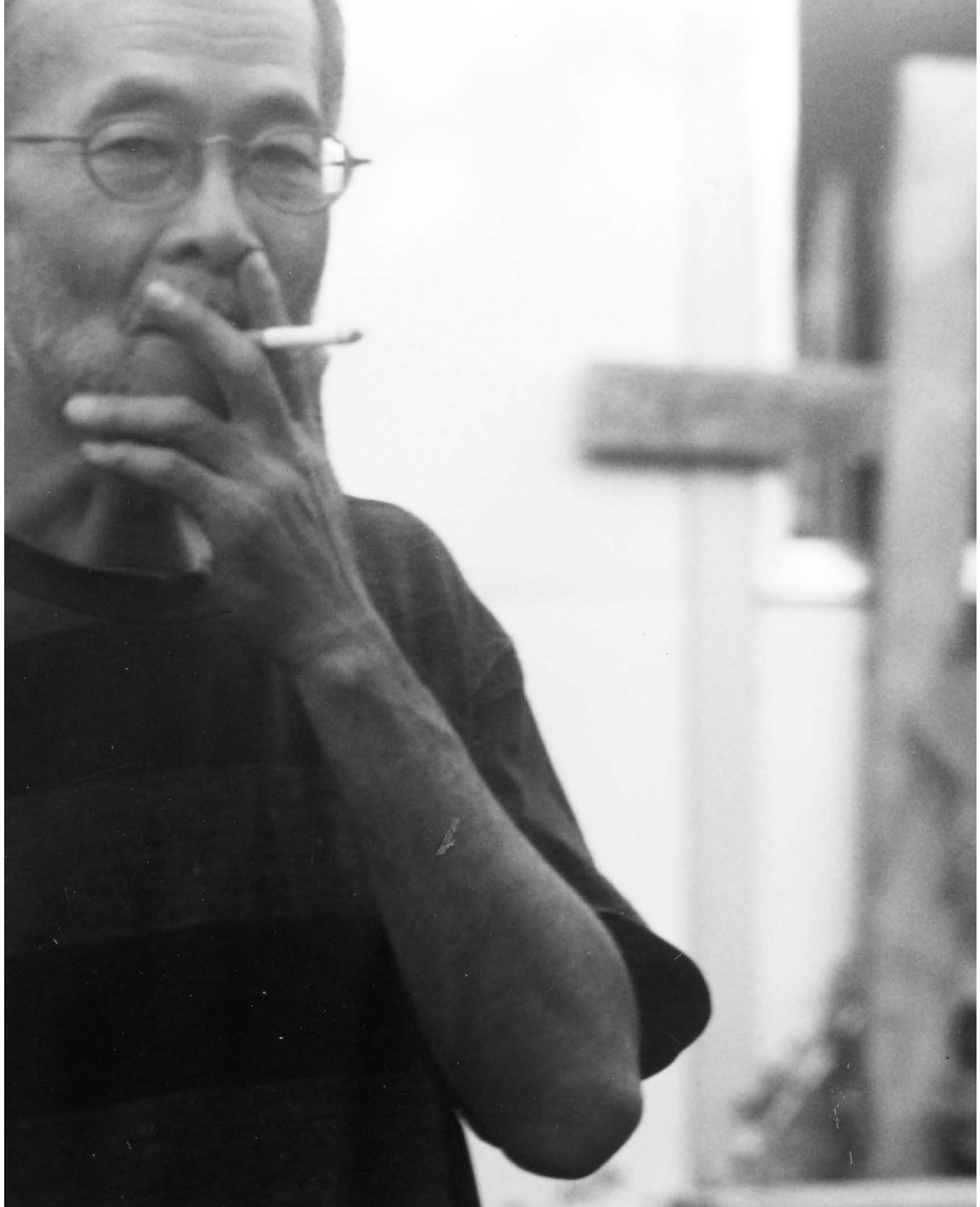
木村二郎さんと多くの体験を共有したデザイナーやギャラリー関係者、地域住民にも声をかけ、活動に協力してもらいました。それらの世代の方々は、二郎さんと出会い 10 年以上が経ち、自分達がお互いに影響を受けながら八ヶ岳で作り上げてきたアートや八ヶ岳での暮らしへの思いや原点を、次の世代へも伝えていかなければという責任感のようなものを感じていたところでもありました。そのため、関係者へのヒアリングは、できるだけ 10 ～ 20 歳代の若い次世代（大学生など）を中心に進めてもらうように試みました。作品や空間にじかにふれ、二郎さんを知る人たちの熱い思いや、本物の物をみる目・感性、また地域の歴史・資源、自分達の原点を語ってもらうことは、世代をつなぐことでもあり、お互いの刺激にもなっていきました。

活動してよかったこと

それぞれのギャラリーやカフェを訪れる人たちの世代が、若い方から年配の方と層が幅広く厚くなっていきました。二郎さんの家具とダンスのコラボレーションなど、以降、様々な拠点で二郎さんを意識したイベントが立ち上げられました。また、企画展でも隠れたテーマともなった「縄文」という八ヶ岳の文化歴史が改めてクローズアップされ、今年 2010 年に入り、八ヶ岳周辺の多くのミュージアムやアーティストが、縄文をテーマにイベントを計画しています。また木村二郎さんの作品写真集が、出版社より発売されることが決定したことは、私達にとっても大きな喜びとなりました。

課題など

八ヶ岳南麓が長野県境から広域に渡るため、各会場を結ぶ方法や、MAP を上手く活用していただくための提案や方法を、もっと効果的に発信することができればよかったなあと思っています。また、冊子の完成予定が 8 月から 10 月にずれ込んだことは、みなさまを少々がっかりさせてしまいました。



今年新たに、二郎さんのことをもっと知りたいという有志が集まり、今回のプロジェクトで開催したトークショーやその他の資料をもとに、映像を交えたイベントが予定されているという。また二郎さんが主宰していたギャラリートラックスでは、若いアーティストによる新しい動きが注目を集めている。

今後の予定

木村二郎さんを知る人達は、自分達の原点を改めて見つめ直したと思います。その後、ギャラリー活動が忙しくなったところや、二郎さんとゆかりのある空間とダンスのコラボレーションイベントを行うところなど、ネットワーク化した拠点のそれぞれの活動も盛んになってきました。ヒアリングのなかで、「二郎さんがいなくなって八ヶ岳がなんだか乱れた」というコメントを頂いたことはとても印象に残っています。

八ヶ岳南麓では、今後も移住を希望する若い世代が増えていくことでしょう。彼らがネットワークしながら、地域の資源・文化への尊敬の念を受け継ぎ、そのなかで、リノベーションや空き家活用がドンドン進められていくように協力していきたいと思います。

また、そういった人たちが集まる実験的空間・拠点が増えて、“自分の居場所”を掲げる旗を増やしていきたいと思います。

他のNPOに伝えたいこと

活動の目的がはっきりしていること。もう一つは、出来るだけ幅広い世代がともに活動に参加できるように、プロジェクトを進めていくことが理想だと思います。世代が繋がるということは、ひとつのプロジェクトの実行性にとどまらず、地域やひとつのコミュニティの永続性にとっても、実はとても重要なファクターなのだと思います。